

一八八六年四月二十二日(木)

コシポールの別荘における聖ラーマクリシュナと信者たち

ラカール、シャシー、校長、ナレンドラ、バヴァナート、スレンドラ、ラジェンドラ、サルカル先生

コシポールの別荘。ラカールとシャシーと校長が夕方、庭をぶらぶら歩いている。タクール、聖ラーマクリシュナは病氣治療のため、この別荘にずっと滞在していらつしやる。タクールは二階の部屋におられ、信者たちが看病している。今日は木曜日、グッド・フライデー聖金曜日(キリストが十字架にかけられた日)の前日。一八八六年四月二十二日夕方。

校長「あの方(タクール)は、三性トリダ(サットヴァ、ラジャス、タマス)を超越して、まるで子供のようであらつしやる」

シャシーとラカール「タクールはご自分で、そう言つていらつしやいますよ」

ラカール「塔の上にひとりであがつている人のようですね。そこからいろんなことがわかるし、いろんなものが見える。しかし、誰もそこには行けないし、その人に接触することもできない、という

わけです」

校長「こう言っておられますね。この境地になると、いつも神を見ることができると——。世俗の汁気が全くなくなって、乾き切った木のようにすぐに火がつくと——」

シャシー「知性の種類について、チャルに話していらつしやいました。

至聖かみを求め理解する知性が正しい知性であつて、金をもうけたり、家を建てたり、代理治安官や弁護士の仕事をする知性は低い知性だと——。それはちょうど薄く水っぽい乳のように、なかに押し米を浸しても軟らかくはなるが、何の風味も栄養も加わらないと——。そうではなくて、神に近づき達するための知性は、濃い上等の練乳コッペンスマルクのようだと——」

校長「アハー！ いいお言葉だ！」

シャシー「苦行者タパッシのカーリーシ（後のスワミ・アペーターナンダ）はタクールにこう言つたんです——『喜びがどうしたと言うのですか？ ビール人たちはいつも嬉しそうにしています。未開の土人たちは年中、ホー、ホー言つて踊つたり歌つたりしています』（訳註、ビール人——現パキスタン、シンド州周辺に暮らしている先住民族）

ラカール「そうしたらタクールは、こうおっしゃつた——『何言っている？ プラフマンの喜びと世俗の喜びが同じものだと思つているのか？ 普通の人間は世俗の喜びだけしかわからない。世俗のことに對する執着がすっかりなくならなければ、プラフマンの喜びは得られないのだ。一方には金や感覚の喜びがあり、一方には神に触れる喜びがある。この二つが同じものだとも言うのか？ 賢者リッシ

「私たちはこのブラフマンの喜びを味わっていなすつたのだ」と

校長「カーリーはいま、ブツダ尊者デューヴァに心を集中しているので、それで、すべての喜びを超越する、  
というようなことを言うのだと思うよ」

ラカール「ええ、タクルの前でもブツダ尊者デューヴァの話をしていました。大覚者パラマハンサ・デューヴァ様が、『ブツダ尊者デューヴァは神の化身だ。そういう方を標準にできるかい？ あの方が偉大だから、あの方の教えも偉大なんだ』とおっしゃった。またカーリーはこう言いましたよ——『すべてはあの御方の力によるのです。あの力から神の喜びも出てくるし、あの力から世俗の喜びも出てくるのです』」

校長「で、タクルは何とおっしゃった？」

ラカール「こうおっしゃいましたよ——『何だつて？ 子供をこさえる力と、神を覚さる力が同じだつて？』」

〔聖ラーマクリシュナと信者たち——女と金こそが最大の障害〕

別荘の二階にある、広間グで、タクル、聖ラーマクリシュナは信者たちと坐っておられる。病状がだんだん進むようなので、今日また、マヘンドラ・サルカル先生とラジェンドラ・ダッタ先生が診察に来ていた。——何とか治療して、少しでもお楽にさせたいと皆は真剣だ。部屋にはナレンドラ、ラカール、シャシー、スレンドラ、校長、バヴァナート、その他、何人もの信者たちが控えている。

この家はパコパラ家の所有である。家賃は六〇〇六五タカ。青年信者たちはほとんどここに泊まり

込んでいる。彼等が一日中タクールの看病をしているのだ。家族持ちの信者たちは毎日のように通ってきて、時々泊まって行く。彼等とて一日中看病をしていたのだが、皆、仕事にしばらく休んでいて、それが叶わぬのである。別荘の費用を支払うために、それぞれが力に応じて分担している。だがほとんどの費用はスレンドラが出しているのだ！ 別荘も彼の名義で借りているのである。バラモンの料理人と女中を一人、ずっと雇ってあった。

聖ラーマクリシュナ「(サルカル先生たちの方に向かって)——とても費用がかかるんだよ」

サルカル先生「(信者たちを指しながら)——この人たちがみんな用意していますよ。別荘の費用から何から全部、よろこんで出しています。(タクールに向かって) わかったでしょう。金は必要なものだけだということが——」

聖ラーマクリシュナ「(ナレンドラに)——何とかお言い」

タクールはナレンドラに答えさせようと思われるのだが、ナレンドラは黙っている。医者がつづけて言った——

医者「金は要るものです。それから女も要る」

ラジェンドラ先生「この方(タクール)の奥さんが食事をつくっておられるのですよ」

サルカル先生「(タクールに向かって)——よくわかったでしょう?」

聖ラーマクリシュナ「ハ、ハ、ハ、大そう厄介なものだねえ!」

サルカル先生「面倒なことがなかったら、誰だってバラマハンサになれますよ」

聖ラーマクリシユナ「女の人に触られると気分がわるくなる。触ったところがズキズキ痛むんだよ。トゲ魚のトゲに刺されたみたいだに——」

医者「それはわかります。——しかし、それ(女の人)なしではやっていけないでしょう?」

聖ラーマクリシユナ「金を手に持つと手がかじかんでしまうんだ! 息がつまってしまふんだ! でも誰か金を明正ただしくに使えば——神さまのために使つたり、サードウや信者たちに奉仕セツツしたり——そうすれば悪くないよ。

女の人とかかわっていくのが現象マヤの世界なんだよ! そうして神のことを忘れるんだ。宇宙の大実母がこのマヤーの姿——女の人の姿になって現われていなさる。このことをはつきり知れば、もう二度とマヤーの世界で暮らそうなどという気が失せるよ。すべての女性が大美母マであることを知れば、明知ウレヤ・ササウの世界で過スごすことが出来る」

ホメオパシーの薬を飲んだので、ここ数日、タクールは少し薬におなりのようである。

ラジエンドラ「この病気がお治りになったら、(あなたは)ホメオパシーの医者にならなければ……。そうでなくては、生まれてきた甲斐がないというものです(一同笑う)。

ナレンドラ「皮ほど大事なものは無い(Nothing like leather)——『靴屋にとってはこの世で皮ほど大事なものは無い』の意」

間もなく、医者たちは帰っていった。

### 聖ラーマクリシュナはなぜ女と金を放棄されたのか

タクールは校長と話していらつしやる。金<sup>々</sup>についてのご自分の境地をお話しになるのだ！

聖ラーマクリシュナ「(校長に向かつて)あの人たちは、女と金がなくてはやっていけない<sup>々</sup>と言ったがね、わたしがどんな境地にいるのか、ちつともわからないんだよ。

女の体にちよつと手が触れると、手がたちまちかじかんでしまつて、おまけにズキズキ痛むんだ。

もし、親しい気持ちになつて、誰か女の人のそばにいつて話を始めると、わたしと女の人の間に何か幕のようなものができて、そこから向こうへ、どうしても進めない。

部屋に一人でいるときに誰か女の人が入ってくると、わたしは突然、子供になつてしまふ。そして、その女の人を母親だと思つてしまふんだよ」

校長は驚きながら、タクールのベッドの傍に坐つてこの話を聞いていた。ベッドから少し離れたところでナレンドラがバヴァナートと話をしている。バヴァナートは最近結婚して——仕事を探すのに懸命で、なかなかコシポールにきてタクールにお会いするヒマがない。タクール、聖ラーマクリシュナは、バヴァナートのことを大そう心配しておられる——彼が世俗の生活に巻き込まれないかと。バヴァナートの年令は二十三、四才である。

聖ラーマクリシュナ「(ナレンドラに)うんと元氣をつけておやり——」

ナレンドラとバヴァナートがタクールの方を向いて微笑んだ。タクールは手まねをしながらバヴァ

ナートに向かつておっしゃる——「勇者になるんだよ。女が泣いても我を忘れちゃいけない。女つてものはすぐ泣くんだから——。ハナをかむときだつて泣くんだ！（ナレンドラとバヴァナート笑う）  
 至<sup>かみ</sup>聖に心をしつかり結んでおけ。雄<sup>お</sup>々しい精神<sup>こころ</sup>の持ち主は、女といつしよに住んでいても決して性交しないよ！ 妻とはいつても、神さまの話ばかりするものだ」

少したつてタクールは、再びバヴァナートに手まねでおっしゃつた——「今日はここで飯を食べろ」  
 バヴァナート「はい、そうさせていただきます。タクール、私は大丈夫ですから、どうぞご心配なく——」

スレンドラが入つてきて坐つた。ポイシャク月（ベンガル暦の正月）なので、信者たちは毎夕、タクールに花輪をもつてきて捧げる。その花輪を、タクールは一つ一つ首におかけになる。スレンドラは黙然と坐つていた。タクールはうれしそうに彼をごらんになつて、花輪を二つおあげになつた。スレンドラはタクールを拝してから、その花輪を頭で触れて、それから自分の首にかけた。

皆、黙つたまま、タクールの方を見ている。やがて、スレンドラがあいさつをして立ち上がった。帰るつもりなのだろう。帰りしなにバヴァナートを呼んで、窓に竹すだれをかけるようにと言つた。夏のさなかで、タクールのいらつしやる二階の広間は、日中ひどく暑くなる。それでスレンドラは、竹すだれを持ってきたのである。

聖ラーマクリシュナ、コシポールの別荘にてヒーラナンダなどの信者たちと共に

〔タクルの教訓——あるものすべてあなただけ——ナレンドラとヒーラナンダの性格〕

コシポールの別荘の二階の部屋に、タクル、聖ラーマクリシュナは坐っておられる。タクルの前には、ヒーラナンダと校長ほか、二、三の信者が坐っている。ヒーラナンダは友だちを二人連れてきていた。彼はシンド州（現バキスタン）の人である。カルカッタの大学を卒業してからは、ずっと郷里に住んでいた。聖ラーマクリシュナの病氣のことを聞いて、お見舞いに来たのである。シンド州はカルカッタから約三五〇〇kmほど離れている。タクルもヒーラナンダに大そう会いたがっておられた。

タクルはヒーラナンダを指でさして、校長に手まねでおっしゃった——「すばらしい青年なんだよ」（訳注——ヒーラナンダは郷里に帰って、シンド・タイムス、シンド・スタルという二つの新聞を発行している有能な青年）

聖ラーマクリシュナ「彼のこと、知っているかい？」

校長「はい……」

聖ラーマクリシュナ「（ヒーラナンダと校長に向かつて）——お前たち、二人で何か話をしろ。わたしは聞いているから——」

校長が黙っているのを見て、タクルは校長にお聞きになった——「ナレンドラはいるかい？ あれを呼んで連れておいで」

ナレンドラが上がつてきてタクルのそばに坐った。



聖ラーマクリシュナ「ナレンドラとヒーラナンダに」すこし、二人で話をおし——」

ヒーラナンダは黙っている。あれこれ大いにためらったあげく、やっと話しはじめた。

ヒーラナンダ「(ナレンドラに)——あのう……、神の信者が悲しみや苦しみを味わうのは、なぜだと思いませんか?」

ヒーラナンダの声音こゑは蜜のように甘くやさしい。彼の話しぶりを聞いた人は誰でも、この人の心の中は愛に満ち満ちているということがわかるのだ。

ナレンドラ「宇宙の摂理スエラってやつが厄介スエラなんですよ! 僕ならもつとマシな世界をつくったのになあ! (The scheme of the universe is devilish! I could have created a better world!)」

ヒーラナンダ「でも、悲しみや苦しみがなかったら、幸福感も味わえないのではないでしようか?」  
ナレンドラ「私は宇宙の計画を作っているではありません。ただ、現在の計画への私見を述べただけですが…… (I am giving no scheme of the universe but simply my opinion of the present scheme)。」

しかし、一つのことを信じていれば、すべては解決するのですよ。神と世界は同一であるとすると神論が、我々の唯一の避難所です (Our only refuge is in pantheism)。すべてが神なのだ——この信念ができたならあらゆることは解決しますよ! すべては、ほかならぬ自分自身がしているのです」

ヒーラナンダ「そのことを口で言うのは至ってやさしいのですがねえ……」

ナレンドラは、シャンカラのニルヴァーナ・シャットカム(六連詩)を、節をつけて朗詠した。

一、オーム われ心に非ず、知性に非ず

アハムカール  
個我、精神に非ず

また、眼、耳、鼻、舌に非ず

地、水、火、風、空に非ず

われは歓喜そのものなる至上意識

われはシヴァ（絶対者）なり、われはシヴァなり！

二、われは生気に非ず、五風に非ず

サプタ・ダートリ（訳註2）  
七要素に非ず、五蔵に非ず

舌、手、足に非ず、性器、排泄器に非ず

（訳註1）パンチャ・ヴァーユ  
ヴィヤーナ（介風）——ブラーナ（出風）、アバーナ（入風）、サマーナ（等風）、ウダーナ（上風）、

（訳註2）七要素——血、肉、骨、髄、脂肪、消化液、精液など、肉体を構成する七つのもの。

（訳註3）五蔵——人間の身体は五つの蔵（鞘）『五層の身体』からなっていると考えられている。その五つとは、食べ物より成る物質の鞘、生気より成る生気の鞘、意識や心より成る意の鞘、智識や理性より成る智識の鞘、喜びより成る歓喜の鞘。

われは歡喜そのものなる至上意識<sup>チダーナンド</sup>  
われはシヴァなり、われはシヴァなり！

三、われに好き嫌いなく、貪りなく、迷いなし<sup>むさほ</sup>  
虚榮<sup>虚</sup>心なく、自尊心なし<sup>エゴ</sup>  
法なく、富なく、欲縛なく、解脱なし<sup>モクシャ</sup>  
われは歡喜そのものなる至上意識<sup>チダーナンド</sup>  
われはシヴァなり、われはシヴァなり！

四、われに徳なく、罪なく、喜樂なく、悲苦なし  
真言なく、聖地なく、ヴェーダなく、供儀なし  
食する行為なく、食する人なく、食する物なし  
われは歡喜そのものなる至上意識<sup>チダーナンド</sup>  
われはシヴァなり、われはシヴァなり！

五、われに死なく、恐怖なく、カーストなし  
父なく、母なく、誕生もなし

仲間なく、友なく、師なく、弟子なし

われは歓喜そのものなる至上意識チダーナンド

われはシヴァなり、われはシヴァなり！

六、われに能所のうじよの別なく、性しよなく、相そうなし

救い主に非ず、自由解脱に非ず

われは感覚を超えて一切処じよに遍満する

われは歓喜そのものなる至上意識チダーナンド

われはシヴァなり、われはシヴァなり！

註、能所のうじよ——主体と客体、する側とされる側、  
性しよ——性質、相そう——姿、形

ヒーランナダ「すばらしいです」

タクルル、聖ラーマクリシュナはヒーランナダに手まねでおっしゃる——「ナレンに何かお言い——」  
ヒーランナダ「一方の隅すみから部屋を眺めるのも、部屋の真ん中に立って部屋を眺めるのも同じことです。〃おお、神よ！ 私はあなたの召使めいしい——これでも神を感得することができまし、また、〃彼カ（神）は我ガ（ソーハム）——これでもおなじです。一つの戸からだけ部屋に出入りするもよし、いくつもの戸から部屋に出入りするもよしです」

一同は沈黙している。ヒーランナダはナレンドラに、「何か歌って下さいませんか？」と言った。

ナレンドラは節をつけて、カウビーン・パンチャカム(サンスクリット)をうたった。(訳註、カウビーン—ふんどしをまとった人の意で出家修行者を指す。パンチャカム—五連詩)

一、常にヴェーダーンタの哲理をことば楽しみ

托鉢たくはつの食に満ち足りて

悩なやみなき心で行いいゆく

出家サンニヤシこそ真まことに幸あはいなり

二、樹の下に宿をかり

掌てを器として食をとり

身につけるものの美醜みしゆうを問わず

出家まことこそ真まことに幸あはいなり

三、自らのうちなるよろこび歡喜よろこびに満ちて

五欲はまったく静かなり

日も夜もブラフマンの想おもいを樂たのしむ

出家まことこそ真まことに幸あはいなり

タクルは、その日も夜もブラフマンの想いを楽しむ……という句をお聞きになると静かに「アハー！」とおっしゃった。そして手まねで、「これがヨーギーのしるしだよ」と示された。ナレンドラのパンチャカム（五連詩）は終わりに近づく――

四、肉体からだと思想おもいの変転を見きわめ

自己の本性のほか何ものをも見みず

内うちも中ちゆうも外がいも考かんえず

出家しゆこそ真まことに幸さいいなり

五、清浄なるブラフマンの名をととなえ

われブラフマンなりと冥想ぼんじゆし

布施ほんじゆに生きて自在なる

出家しゆこそ真まことに幸さいいなり

ナレンドラはつづけて別の歌をうたった――

想え

完全円満にして歓喜そのものなる

形なき大宇宙の根元を――

耳なくして聴き、心なくして思い

舌なくして語り、自らは全現象すべてを超越せる

生命の根源みなもとなる至上の原理を――

聖ラーマクリシュナ「(ナレンドラに)それから、あれを――シ在るものすべてあなただけ!」(ヒン  
ディー語)

ナレンドラはその歌をうたった――

あなたに 私は心を捧げた

在るものすべて あなただけ

見るものは一つ あなただけ

在るものすべて あなたゆえ

すべてのものの あなたは住み家か

あなたの在<sup>いま</sup>さぬところは無い  
すべての心<sup>こゝろ</sup>にあなた(ハリ)は住んで  
在<sup>あ</sup>るものすべて あなただけ

賢者も愚者も ヒンドゥーもイスラムも  
すべてはあなたのお思召し  
在<sup>あ</sup>るものすべて あなたゆえ

カアバや (どの宗教の)どの聖地にも  
お住みなさるのは あなただけ  
あなたの前では 誰でも敬礼  
あなたのすべて あなたゆえ

天から地まで 地の底までも  
目の行くところ どこどこまでも  
在<sup>あ</sup>るものすべて あなただけ

カアバ——イスラム教の聖地メッカのカアバ  
神殿



よく見て私は よく考えた

あなたに比較くらべるものはない

よく考えて よくわかったことは

在あるものすべて あなただけ

「すべての心にあなたは任んで……」という文句を聞いて、タクールはまた手まねでお示しになった——「あの御方は、ひとり一人の胸のなかにいらつしやるんだよ。あの御方は、内アンタルなる導ヤーミンき手なんだよ」

「目の行くところ、どこどこまでも、在あるものすべて、あなただけ！」ということばを聞いて、ヒーランタはナレンドラに話しかけた。——「すべてはあなた！ 今はもう、ただあなた、あなた——私ではないあなた！」

ナレンドラ「一つのことさえ得たならば、万事はいともやすやすとできる——即ち、一のあとにいくらでも〇がつけられる(Give me one and I will give you a million.)——あなたもわたし、わたしもあなた——わたしのほかには何もありません」

こう言つてナレンドラは、アシユターヴァクラ・サンヒター(ギーター)から数行を朗詠した。一同はシーンとして聞いている。

聖ラーマクリシュナ「ヒーランタに、ナレンドラを指して——拔ぬき身の剣を手にもつて歩き回つ

ているようだね。

(校長に、ヒーランナンダを指して)——この人は静かだねえ！ 蛇使いのそばで、コブラが喉をひらげてジツとしている！」

タクールの真我礼拝——校長とヒーランナンダに秘密の話——校長とヒーランナンダと他の信者たち

タクール、聖ラーマクリシュナは、心を内に向けていらつしやる。そばにはヒーランナンダと校長が坐っている。部屋は至って静かだ。タクールの肉体は、常にたとえようもない苦痛に襲われているのである。信者たちが時々その有様を目撃するときは、まるで自分の胸が引き裂かれるような思いをする。しかし、タクールは皆にそのことを忘れさせて下さるのだ。今も何事もないうちに、ニコニコして坐っていらつしやる！

信者たちが花や花輪をもってきていた。タクールは、ご自分の胸のなかのナーラーヤナを拝んでいらつしやる。花をご自分の頭の上のせておられる！それから喉に、胸に、おへそのところにも——。子供が花で遊んでいるように見える。

タクールはいつも言っておられた——「神意識に浸るときは、体のうちに大きな<sup>マハ</sup>気の<sup>ヴァ</sup>流れが<sup>リ</sup>下から上にあがっていくように感じる。——その靈気が上がると、神の存在をありありと実感する」と。こゝんでは校長を相手に話をはじめられた。

聖ラーマクリシュナ「(校長に向かつて) 靈氣ヴァーユはいつ上がっていくか、分からないんだよ。今は子供の気分だ。だから、こうやっているのさ。何を見ているか分かるかい？ 体がね、ちょうど竹人形に着物を着せたような感じで、それが動いているんだ。中に誰かいて、それで動いているんだな。

中身をくり抜いたカボチャみたいでもあるよ。中には世間に対する何の執着も入っていない。中はきれいに、ほんとにきれいなサツパリしたものさ。それから……」

タクールは話しつつづけるのが非常に苦痛で疲れているように見うけられた。校長は次にタクールが何をおっしゃろうとしているのか、すばやく推察して言った——「それから、中に至聖かみがお見えになるのでございましょう」

聖ラーマクリシュナ「中にも外にも、両方ともに見えているよ。円満完全のサツチダーナンダが！ サツチダーナンダだけが鞄サヤ(肉体)を支えて、その中にも外にも在りあなさる！ このことが見えるんだよ」

校長とヒーランナンダは、この見真ブラフマ、ダルシヤン(見梵シッヒ)の言を聞いている。しばらくして、タクールはまた彼等の方を眺めながらお話しになった。

聖ラーマクリシュナ「(校長とヒーランナンダに向かつて) お前たちみんな、骨肉みうちだと思っているよ。他人だなんて感じはしない」

〔聖ラーマクリシュナとヨーガの境地——円満完全の覚り〕

「みんな一つひとつの鞘さやで、頭のところあたまが動いている。

あの御方に心がつながっている時は、苦しみから離れているのがわかる。（原典註）

今はもう、一枚の肌皮がサッチダーナンダにかぶさっていて、その端つこの方に喉の痛みが引つかつている感じだよ」

タクールは再び沈黙された。しばらくすると、また話された。——「物質ものの存在ある上に霊が溶けこみ、霊の上に物質が溶けこむ。肉体が病むと、自分（私）が病気になったという感じがする」

ヒーランナンダはタクールのおっしゃったことをはっきり理解したくて、熱っぽい目を校長に向けた。それで校長は、ひと言説明をした——「熱湯でヤケドをした場合、湯でヤケドをしたと人は言うけれど、そうではなくて、熱でヤケドをしたということです」

ヒーランナンダ「（タクールに）——お教え下さいませ。神の信者でも、なぜ苦しみをうけるのですか？」

聖ラーマクリシュナ「肉からだ体の苦しみだよ（苦しんでいるのは肉体だけだ）」

（原典註）それを獲たならば、これに勝るものはない

いかなる困難に遭おうとも、動揺することはない

——ギター 6・22 ——

タクールは何をおっしゃろうとするのか、兩人は固唾かたずをのんで待つていた。

タクールはおっしゃる——「わかったね？」

校長は小声でヒーランタに何か言った——

校長「人びとを導くためにですよ——手本なんです。これほどの肉体的苦痛のなかにあつて、しかも心は十六アナ(100%)、神に帰一している！」

ヒーランタ「全く——。ちょうどキリスト(Christ)における十字架(Crucifixion)のようなものです。でも、どうしてこの方がこんなに苦しまなければならないのでしょうか。私はそれが不思議(Mystery)です」

校長「それはタクールがおっしゃるように、大実母ウの思召おぼしめしです。この場で、あの御方はかくの如く遊戯し給う、ということですよ」

二人は低い声で静かに語り合っている。タクールはヒーランタに合図して何かお聞きになるのだが、彼にはその合図が何のことやらわからない。するとタクールは再び合図を——「この人(校長)、何て言ったんだい？」

ヒーランタ「この方は、『人々を導くために、タクールが病気になるっていらっしゃるのだ』とおっしゃったのでございます」

聖ラーマクリシユナ「そりゃ、勝手な推測だ——そうじゃない。(校長とヒーランタに向かつて)境涯が変わってきているんだ。誰にでも、靈性が目覚めるように……」というようなことを言うつ

もりはない。末世カキユカの現代は罪があふれていて、それがみんなわたしのところへのしかかってくるからね」

校長「（ヒーランタに）——その時期が来なければおっしゃらないのです。霊に目覚める時期の来た人にはおっしゃるのです」